

家族の訴え

飯塚繁雄さん（田口八重子さん兄、家族会代表）

拉致問題は相当長い時間がかかっております、この問題にご理解とご支援をいただき本当にありがとうございます。私たちは、皆様のバックアップがあるからこそ活動を続けてこられたと深く思っています。また拉致問題は、「政府が責任をもって解決しなければならない」という今の段階にやっと来ました。私たちは、全国を廻って皆様のご理解を得ながら、拉致問題を一日も早く解決してほしいと訴えています。

私の妹は拉致被害者の田口八重子ですが、もう 31 年も経ってしまいました。そしてまた冬が来ました。私たちは冬が来ても暖房がありますし、栄養もとれます。しかし、北朝鮮にいる被害者たちはどうしているだろうか、ということ私たちはいつも考えています。厳寒の冬を迎え、暖房用の燃料が少なく電気も早く消えてしまう、着るものも少ない、栄養もなかなかとれない。万が一病気にでもなったら病院にいき病気をなおす術が北朝鮮にはないということです。

あらゆることを考えますと、一刻も早く返してもらわなければという気持ちが毎日いっぱいになります。そして時間が過ぎていきます。横田めぐみさんも厳寒の冬を 32 回も通り越してきている。向こうにいる人にとっては生死に関わる非常に難しい時期なのです。帰国者に話を聞きますと、相当ひどいということです。私たちが普段生活している中では、全くそういうことを感じませんが、向こうにいる人たちは、辛い思いをしながら、日本の家族あるいは政府が、「いつ助けに来てくれるのだろう」と待ちこがれているわけです。

拉致問題は人権問題として色々取りざたされていますが、まさに人権を蹂躪されたまま今も北朝鮮にいるということが事実であり、これを放っておくということは国家の大きな問題です。また国民一人ひとりの責任と言っては失礼ですが、そのままにされてしまうというのも大きな問題と思っています。

97 年 3 月 25 日に家族会を立ち上げて 13 年経ちますが、皆様に訴える活動を地道に、根気よく、身体にむちを打ってやってきました。救う会の皆さんが協力し、全国のボランティアの方々が活動してくださっています。

そしてこの 3、4 年は、自治体や県会・市議会議員の方々が拉致問題を大きく取り上げていただき、この問題を早く解決しようという動きが全体的に盛り上がってきています。拉致問題はまさに、一刻も早く解決しなければならない問題です。

しかしながら、難しさという点でも、今までに経験がないくらい大きな問題です。日本政府は、長い間、北朝鮮に対する政策がおおろそかだったと思います。一人ひとりの人権という問題をあまりにも粗末にしてきたことが、長い時間が経っても解決できない原因になってしまったと言えるでしょう。北朝鮮に対しては、以前からだまされ続けてきたというのが実態です。何回か政府は変

りましたが、その都度言われてきたことは、「たかが 10 人くらいの被害者のために、北朝鮮との国交をまずくするのか」という発言が国会の中でもありました。

国会議員は、国民一人ひとりの暮らしと安全を守るのが最低限の仕事だと思っています。拉致問題は、国としても、国民としても、何にもまして優先すべき問題だと訴えてきました。色々な議論がありますが、これまで北朝鮮がとってきた態度、あるいは日本政府がとってきた態度について相当反省すべきことがあります。それについて追求しても解決にはなりません、そういう経過を踏まえ、反省の上に立って、ではこれからどうするかということがはっきりと論議されなければ、また前と同じように、北朝鮮にだまされ続けることとなります。

我々が活動してから、幸い 5 人の人が帰ってきました。我々としてはこれは嬉しいことです。しかしまだたくさん被害者が残っているということを忘れてはならないと思います。しかし、5 人が帰ってこられたのは圧力があったからです。アメリカの強い圧力によって北朝鮮がそうせざるをえない状態になった。それによって日朝首脳会談となりました。北朝鮮は拉致問題を解決させた形にして、日本から相当な額の支援をもらおうとしました。国交正常化をすれば日本から多額の支援がもらえるという思惑から、まず 5 人を返して、「もう後はいません」というのが、北朝鮮が言ってきたことです。

これからの対応としては、北朝鮮に対する強い態度、強い姿勢を堅持していかなければならないということが過去の反省から分かると思います。「対話」というのは、なんとなく「お話し合い」で、仲良しになって「被害者を返してください」というような雰囲気だと思いますが、それでは絶対に帰ってこないのです。これまで何回もにがい経験をしています。北朝鮮に 150 万トン以上のお米を支援しましたが、日本にとって何の国益もなく、被害者も返してくれなかった。北朝鮮に対する柔な対応がこの問題を長引かせたのですから、今後は、「日本国民が怒っているのだ」という態度を示すべきだと思います。

その強い怒りは北朝鮮にも響きますし、日本政府に対する大きなバックアップになります。これはもう立証されたことです。最終的には交渉しなければなりません、単なる対話ではなく、強いカードを持たなければ交渉にならないのです。そのカードは国民の世論、政府による制裁で、これが絶対に必要です。カードがない限り、「返してください」という交渉は成り立たないのです。そしてまたなめられてしまうということになります。

私たちは、愛しい家族を取戻すためには、相当な覚悟で取り組まなければならないという思いがありますが、実際に取戻す窓口は政府です。我々がこのこと北朝鮮に行って被害者を取戻すというのは不可能です。一部の議員が行って、全員を取り戻せるかということ、これも全く不可能です。従って政府が、「日本人被害者を全部返せ」という強い態度を貫いて、「そうすれば相当の支援がもらえるぞ」ということもカードとして交渉ができます。

これは交渉というより要求なのです。北朝鮮は犯罪国です。日本は被害国で

す。犯罪国に「返せ」というのは要求です。「無条件で返せ」と言うべきです。しかしあのような国ですから、それだけではうまくいかないかもしれない。だからこそ強い交渉をすること、そして早く交渉の場に引きずり出すこと、これが我々が考えている解決法の一つです。

また、先ほどアメリカの圧力について述べましたが、北朝鮮にとってはアメリカが一番の脅威です。従って、日本政府が主体となって交渉をしますが、アメリカの協力を含め、北朝鮮をまわりから追い詰める。北朝鮮をその気にさせるためにはそのくらいのことをやらなければ、話に乗ってこないと思います。

今回、政権が変わりましたが、我々は政府にお願いするしかないわけで、現政府にさらなるお願いをしていきます。幸い、拉致問題対策本部を引き継ぎ、拉致担当大臣も作り、中井大臣が即動き始めたということですから、期待していきたいと思っています。日本は色々な問題を抱えていますが、拉致問題は優先すべき問題だということを国会の皆様、政府の皆様にご理解いただいて、国民一人でも人権侵害があればなくしていくという意識をもって、拉致問題に強い態度で対応していただきたいと考えています。

もう総理大臣も何人も変わりましたが、私は、拉致問題を解決すれば、日本の歴史の中で、歴史に残る総理大臣になると言っています。是非そうなるようお願いしていきたいと思います。

北朝鮮にいる被害者が一番大変なのですが、待っている私たちも歳をとっていきます。帰ってきたが、親も家族もいなかったということには絶対させたくないのです。少なくともあと1年か1年半のうちには解決してほしいと思います。皆様からも是非政府に意見を言っていただきたいと思います。FAXでも手紙でも、電話でもメールでも結構ですので、声をぶつけていただき、政府が腰砕けにならないようお願いいたします。これからも、皆様の問題でもあると意識していただき、応援を宜しくお願いいたします。

市川龍子さん（市川修一さん義姉）

「今年こそは、今年こそはきっと息子修一に会える」と春の来るのを、耐えて耐えて待ち続けた母が、昨年11月15日、旅立ってしまいました。この日、偶然かもしれませんが、3つのことが起こりました。11月15日は、横田めぐみさんが新潟で拉致された日です。そして私の長男が、アメリカのNASAのケネディ宇宙センターで仕事をしていた時、エンデバーがものすごい爆音とともに大空に向かって飛び立った時刻と、おばあちゃんが天に昇った時刻が符合していたよと、帰国した時に聞いた時は、偶然かもしれないけれど、本当にこの世の中には、科学で証明できないこともあるのかなと思いました。

またこの日は、夏から2か月半に及ぶ密着取材で、母を主人公にしたドキュメントが放送された日でした。母もとても楽しみにしていました。「家族みんなで見ようね」と言って楽しみにしていたのですが、6日前に倒れ、母はどうとう見ることができませんでした。次男は、母の亡骸をテレビの前に引いてきて、

「おばあちゃん、よく頑張ったね」と言って、頭や顔をなでながら泣き崩れていました。

本当ならば、長生きした母にお祝いしてあげたかったのですが、どんなにか息子修一に会いたかっただろうかと思うと、残念で無念で、悔しくてたまりません。

先月 15 日、母の一周忌を済ませましたが、この 1 年何の進展もありません。母の墓前に明るい報告もできず、本当に悔しい思いでいます。母に修一を抱かせてあげることではできませんでしたが、今 94 歳になる父がいます。その父も、日に日に記憶が薄れていくような気がしています。なんとしても父には修一を抱かせてあげたい、記憶がなくならないうちに修一に会わせてあげたいと思っています。

もし修一が北朝鮮で病気でもしているのなら一日でも早く連れ戻して日本での医療を受けさせ、一日でも長く鹿児島での生活を満喫させてあげたいという思いでいます。そう思うと被害者も家族も時間がありません。修一は、10 月 20 日で 55 歳になりました。23 歳で拉致されましたから、31 年という北朝鮮での生活を余儀なくさせているのです。

私には 23 歳の修一の顔しか思い浮かびません。増元るみ子さんとの間に、男の子が二人いるという情報も入ってきました。一人は 3 年前の情報です。北朝鮮は拉致した翌年の 9 月 4 日、水も冷たい元山海水浴場で溺死した、お墓は洪水で流されてない、と全くでたらめな回答をしてきました。

この前、長男が韓国の板門店に行き、北朝鮮側に足を踏み入れることができた。おばあちゃんの写真を胸に抱いて、「おばあちゃん、修ちゃんのいる北朝鮮に、今僕は入っているよ。修一おじちゃん、早く早く帰ってきてよ」と言って、おばあちゃんの写真をなでながら泣いていたそうです。

親兄弟だけでなく、甥っ子までもこんな悲しい、むごい仕打ちをする北朝鮮の金正日が、私は憎くてたまりません。今日は主人がいないので過激な発言になりますが、私は、八つ裂きにしても足りないくらいの心境なのです。金正日が拉致を認めた 2002 年以降も、新たに 5 人の拉致被害者が出ているという情報もあると聞きました。拉致問題をこのまま風化させてしまうと、また、いつ、どこかで拉致が起きるかもしれないのです。日本国民の子や孫やひ孫が、安心して安全に遊べる日本列島にするためにも、強い制裁圧力をかけることはもちろんです。さらに強い圧力が必要だということをご理解いただきたいのです。

金正日は、日本国憲法の 9 条を熟知しています。日本は手も足も出せないと甘く見られているのです。いつまでも北朝鮮の言いなりになっていては、被害者も家族も、ただむなしく時間だけが過ぎていきます。被害者の 31 年の過去を取戻すことはできませんが、未来までも奪う権利はどこにもないと思います。

一刻も早く、皆様の力で救い出していきたい、もう時間がないということをお分かっていたいただきたいと思います。そうでないと、拉致被害者は北朝鮮で一生を終えなければなりません。彼らは北朝鮮の人民ではない、日本国民なのです。どうぞ私たちを助けてください。

何年か前、「奪還」というタイトルの本が出版されました。奪還の意味、誘拐した国に、こちら側から頭をさげて、「お願いですからどうぞ返してください」ということではありません。力づくでも奪い返すのが奪還です。「力づく」とは、現在制裁をかけているこの圧力ですが、もっと強い圧力をかけていただいて、一日も早く奪還していただきたいと思っています。

西岡先生の話にもありましたが、なにやら北朝鮮からの指令で、朝鮮総連が日本のいくつかの団体を動かして、日朝国交正常化のムードづくりをしていると聞きました。その一例が、真向かいの会館で行われたそうですが、彼らに私は言いたいです。「あなたたちにも家族があるでしょう。もし自分が北朝鮮に捕らわれていたら、それでもそんな行動を起こしますか。それならあなたたちは北朝鮮に渡って、北朝鮮の人になりなさい」と私は言いたいのです。少しも被害者家族の心情を分かっています。

先の天皇陛下ご在位 20 年のお話にも、平成 14 年美智子皇后陛下のお話の中にもありました。「どうして日本社会全体が」として、認識が薄かったということをおっしゃっていただきました。政府と国会議員は、必ず奪還しなければならない責任があると思います。政権が代わりましたが、民主党であれ、自民、公明党であれ、私たちの代表が衆参合わせて 700 名以上の国会議員がいます。本当に真剣に取り組んでいただいて、国の恥を、国会議員の恥を国内外にさらさないでほしいと思います。

日本のリーダーがメディアを通じて、国民に向けて、「いつまでも返さなかったら承知しないぞ」という強いメッセージを発信していただければ、一気に国民の怒りが、世論が湧き上がってくると思います。それが必ず金正日の耳に入ります。金正日は、日本の世論の動向を大変気にしているとのことですので、大いに効き目があると思います。オバマ大統領のノーベル平和賞ではありませんが、日本人全員を奪還して、鳩山総理にノーベル平和賞を上げてください。お願いします。

あの羽田のタラップの下に日本人全員を降ろすまで、この拉致問題を重視していただきたいと思っています。そしてさらに大きく国を動かしてください。そして拉致被害者全員を取戻してください。私たちはそうお願いするしかありません。どうぞ力を貸してください。お願いいたします。

斉藤文代さん（松木薫さん姉）

市川さんも言われましたように、毎日毎日、怒りがこみあげてきます。自分はどうしたらいいのだろうかということを毎日考えます。しかし、なかなか自分の思う通りには進まないはがゆさがあります。毎日反省しては、床につく時に、明日はどうしたいだろうかと思っています。長い年月が経ち過ぎていきますので、毎年毎年悩み、北朝鮮で待っている家族に力になれない、何もしてあげられないという思いが募ります。

今日、熊本から来る時に、北九州の皿倉山を見ながら、八幡に住んでいたこ

とがありましたので、薫が小さい頃を思い出していました。山は少しも変わっていませんが、私が住んでいたところは跡もありませんでした。こんなに時代が変わってしまっているのに、どうして助けてあげられないのか、どうしたらいいのかと悲しい思いをしながらこちらに向かいました。

当時は、貧しいけれど家族が全員揃っていて本当に楽しかったです。かなしいことなんか何もなかったです。夕方になると父や母が仕事を終えて帰ってきます。みんなお風呂に入らずに待っていました。当時は薪で炊いていましたから、地元では(釜の墨を)へぐろと言うのですが、「姉ちゃんへぐろがついてるよ」と言われて、笑いながらご飯を食べたことを思い出します。

弟はスペインのマドリッドから拉致され、8年後に北朝鮮に住んでいることが分かったのですが、その時にはもう父は亡くなっていませんでした。あちこち必死で探して、お願いしてまわっていたのですが、会うことなく亡くなりました。母に手をさしのべ、「頼む」ということだったと思います。どうすることもできず母親に託したのですが、母は気が弱くて動転したと思います。それでも自分が頑張らなければと気丈に動いていました。

私たちは、お母さんはまだしっかりしているから働けるとあって、一生懸命頑張っていたのですが、一人で抱えていた苦労というのは本当に辛かっただろうと思います。そして認知症というか、徘徊が早かったですね。どうしても母親の側にいなければならないということで、私たちは少し遠いところにいたのですが、母の側に来て、自宅で5年くらい介護しましたが、どうしても自宅では介護できなくなり、病院の先生が入院させなければならないということで、入院させました。もう15年も寝たきりです。全然動けず、母は何度も死ぬ思いをしています。

しかし、15年寝たきりで薫を待っていたのです。家族は皆そうです。1日でも1時間でも会えたらいいと思いながら待っているのだなと思います。顔を見るのが辛いのですが、私は長女でもありますし、お母さんをしっかりと守らなければならないという気持ちで病院に行きます。去年、一昨年は、私が足を骨折して、同じ病院でリハビリを受けたこともありましたが、薫と体形が似た先生がおられて、リハビリを受けながら母を見ていますと、その先生を目で追うのです。先生がこちらを向くと薫ではないと分かるので、ちょっと恥ずかしそうに苦笑いして、さみしそうな感じでした。

そういう時はたまらなくなります。日本政府が何十年も解決できないこと自体が、私は不思議でならないのです。よその国なら絶対に助け出す筈なのに、日本という国はこんな国だったのだろうか。そう思いながらも国民の皆様にご支援をいただき、力をいただいで今日に至っていることを感謝しています。私たちができることは、皆様の前でお話することです。少しでもお力を借りて、全員を日本の地に戻し、家族と一緒に過ごせる時間ができればいいなと思っています。

弟は、2002年と2004年に、北朝鮮から骨が出されました。一人だけ呼び止められて、外務省の方とお話をさせてもらった時に、「これは弟さんの骨だ」と

言って出された時は、本当に悔しくて泣きました。1回じゃないんです。2回も出されたのです。「向こうはどうおっしゃったのですか」と聞くと、「かもしれない」と言うのです。「かもしれない」とはどういうことなのだろうと、当時は分からなかったのですが、結局、その骨は、他人様の骨と動物の骨でした。本当に失礼な話ですよ、家族をこんなに苦しめて。北朝鮮は許せない国だと私は一人で怒っていましたが、お父さんには悲しい思いをさせなくてよかったですと思いました。「お父さん、薫が帰ってきましたよ」と報告したいし、お母さんにはいつもベッドの側で、「もう少しだから」と言っています。日本国中の皆様が助け出さなければと思っているのだから、なぜか分かりませんが、私はもう少ししたら帰ってくると思っているのです。それで、「今まで頑張ってきたのだから絶対頑張ろうね」と言います。「頑張ります」とは言いますが、やはり辛いところがあるようで、1日でも1時間でも会わせてあげたいと思います。

「母がいてくれてよかった」と薫が言う日がくるまで、私たちは頑張ろうと思っていますが、母も88歳になり、拉致されて30年になります。何でこういうことになってしまったのだろうと思いますが、助け出さなければ一生悔いが残ります。歳はとつても、皆様と一緒に奪還できるよう北朝鮮と戦っていきたいと思います。ボロボロになるまでやるのが私の宿命だと思っています。取戻さなければならぬということが、私の頭の中にいつもありますので、家族会、救う会、皆様のお力をいただいて、頑張っていきたいと思います。お願いばかりですが、帰ってくるまで頑張りますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

平野フミ子さん（増元るみ子さん姉）

私たちは、もう1回、家族のあの笑顔を見たい。そのために活動しています。家族が声をあげなければ政府は動いてくれないということが分かり、12年前に声をあげました。幸い5人の人が帰ってきました。本当にあれは嘘みたいな現実だったと今改めて感じます。あれから7年経ちます。しかし何も進んでいないのが現実です。

5人が帰った翌年に、蓮池薫さん・祐木子さんに半蔵門のホテルでお会いしました。その時私は、この冊子を持っていきました。そしたら、祐木子さんも薫さんも、「あっ、るみちゃんだ」と言ってくれました。私はこれまで、るみ子は北朝鮮に拉致されていると訴えて参りましたが、でも本当にあちらで目撃したということは何も聞いていませんでしたので、半信半疑で、嘘であってほしいという気持ちが少しありました。でも祐木子さんも薫さんも、「あっ、るみちゃんだ」、「るみさんと一緒に暮らした」という言葉が現実私に私の耳に入った時に、「ああ、やはりるみ子は北朝鮮に行っていたんだな」ということを心に刻むしかなかったのです。

色々なことを祐木子さん、薫さんから伺いました。夏のスイカの時期には、スイカの皮を塩漬けにして漬物にしたそうです。スイカの漬物は、うちの父が好きだったのです。るみ子はあまり料理は上手な方ではなかったけれど、それ

だけはしていたんだとか思いました。中学校時代は卓球をしていましたので、あちらの子どもたちに、身長が 162 センチあったものですから「大きい姉ちゃん」と言われて、皆さんと仲良くしていたそうです。それだけに、いつかは返してくれるだろうという気持ちで朝鮮語も習い、朝鮮語の歌も覚え、あちらの生活をしていたことは、認めざるをえないと思います。

でも、自分から行ったわけではありません。日本の領土で誘拐されたのです。市川修一君と一緒に、夕日を見に行くと言って出かけたまま、ずたぶくろに入れられて、工作船に乗せられて、何時間も船に揺られて、北朝鮮の南浦に着いた時には、自分で歩くことができないくらいでした。工作員におぶさって降りた、ということも聞いたそうです。

そういうことを聞くと、どんなに怖かったらうかと。いつ殺されるのだろうかという思いで北朝鮮に渡り、渡ってからでも 1 週間、10 日くらいは独房みたいなところに入れられたらしいです。修一君は返したと聞かされ、自分だけが独房で過ごさざるをえなかったと聞いたそうです。

私たちは、その一つひとつが初めて耳にしたるみ子が拉致された後の 1 年間の話でしたから、本当に辛くもあり、生きていたんだという、本当に複雑な気持ちでした。

でも、るみ子は絶対に死ぬ筈はないのです。卓球もし、足も太い、身体の丈夫な子でしたから、「心臓麻痺で死んだ」ということは絶対にありえない。これは断言してもいいと思います。北朝鮮がよくあんなことを抜けぬけと言い、本当に虫けらのごとく扱われたことが、私は悔しくてたまりません。

去年 11 月 15 日、市川トミさんが亡くなりました。あれほど金正日が憎いと思った日はありませんでした。父が亡くなった時も本当に残念でたまりませんでしたけれど、92 歳のおばあちゃんが、私が電話をすると涙声で「いつもごめんな」といつもおっしゃっていました。いまでもその声が聞こえます。あのおばあちゃんも修一君に会わせることなくあの世に召されてしまいました。あの日ほど金正日が憎たらしかったことはありません。

あれから 1 年、あっという間に経ってしまいます。拉致問題はいつ解決するのだろうかと、精神的に落ち込むこともあります。誰とも会いたくない時もあります。でも私も主婦ですので、辛い顔ばかりはできず、そういうことは胸の中に秘めています。どうして経済大国の日本が、いや経済大国だからこその問題を解決できなかったのでしょうか、どうして 30 年以上も国民を取戻せないのかと、悔しくてしかたがありません。

この問題を解決するには国民世論の力が絶対に必要です。国民世論が沈滞してしまうと、民主党政権は左よりの方も多いですから、また国交正常化を言い出すかもしれませんが、蓮池薫さんも帰国直後におっしゃっていました。「国交正常化をして山奥の収容所に入れられていただろう」と。国交正常化して、皆さんの血税があちらの方に行くことは絶対に許してはならないことです。

私たちは、家族を取戻したい。この 1 点だけで訴えてきましたが、これは本当に大変な問題を皆様に提起したことだと思えます。この問題が解決されなけ

れば、拉致被害者は暗い深い闇の中に押し込められたままになります。そうならないように私たちは訴えさせていただいています。本当に微力ですし、話も下手ですが、皆様にこうしてお伝えしなければ居ても立ってもいられないのです。そして日本が大好きですから、日本が沈没してしまうのではないかと、北朝鮮や中国に乗っ取られるのではないかと心配です。日本の文化を継続していかないと子孫に対して申し訳ないと思います。

鳩山総理が就任してすぐに私たちは官邸で鳩山総理にお会いすることができました。私は、亡くなる前のこの父の写真をお見せしました。父は、「俺は日本を信じる。お前たちも日本を信じろ」と言って亡くなりました。ですから、「私たちはもう1回日本を信じます。信じたいのです」と申しあげました。民主党政権になってどうなるか、本当に分かりません。期待はしています。しかし、時間を争うことなのに、まだ目に見える動きがありません。聞こえてきません。だからみなさんの声が絶対に必要です。

「拉致問題はもう風化した」となれば、闇の將軍と言われる人が国交正常化をめざすでしょう。そうすると拉致被害者は帰ってきません。日本人を取戻すまでは、絶対に国交正常化をしてはならないことを、是非官邸に伝えてください。

忘れてはならないことがあります。この12年間私たちとともに戦ってくださった中川昭一先生が10月に亡くなられました。頭をガンと叩かれたような気分になったことを思い出します。本当に一生懸命やってくくださったのに未帰還者の問題が解決していないことを残念に思っておられました。中川先生のためにも、日本の皆様のためにも、拉致問題を解決しなければならないと思います。拉致被害者が空港に降り立つ日まで私たちは頑張ります。

皇后陛下がおっしゃった日本人の資質が見えてこない状況があります。日本人は思いやりの心を絶対に持っている筈です。今も拉致被害者が帰国を求めて泣いています。その声をどうぞ聞いていただきたいと思います。私たちは絶対にあきらめることはありません。どうぞこれからもご支援ください。ありがとうございました。